

●言語文化研究所主催公開講座 二〇〇八年六月二十五日開催

星の王子さまとダライ・ラマ十四世

——ユマニストの系譜——

今 枝 由 郎

朝比奈 本日は言語文化研究所主催の講演会にお集まりいただき、どうもありがとうございます。司会の朝比奈です。よろしく願います。今日はフランス国立科学研究センター(CNRS)研究ディレクター、そして現在、東京外国語大学のアジア・アフリカ言語文化研究所の客員教授をされている今枝由郎先生のお話を伺います。

今枝先生はチベット仏教及びチベット、ブータンの歴史・文献学を専門にしていらっしゃいますが、大変ユニークな経歴をお持ちの方で、大学時代に既にフランスの国費留学生としてフランスに渡られまして、それからずっとフランスでチベット仏教の研究をなさっています。二十代のときに既にフランス国立科学研究センターの研究員とされました。もちろん由緒ある研究所ですから、日本の若者が採用されるといのはめつたに

ないことです。そしてフランスで国家博士号をお取りになり、現在はそのセンターの研究ディレクターとして活躍なさっています。

一九八一年には、当時ほとんど鎖国状態だったブータンにいらっしゃって、チベット仏教の一つの中心地であるその国およびその十年間にわたって研究をされました。その間、ブータン国立図書館顧問という仕事にもつかれ、ブータンの国王とも親しく交際をされたそうです。それにつきまして、パンフレットもあります。ごく最近、岩波新書で『ブータンに魅せられて』という本を出版されました。とてもおもしろい本です。

今日は、その今枝先生に「星の王子さまとダライラマ十四世」というタイトルでお話をさせていただきます。このタイトルを見ると、不思議な結びつきと思うかもしれませんが、「ユマニス

トの系譜」という副題を見れば、恐らくなるほどと納得できるような気がするのではないかと思います。長年にわたるフランスでの仏教研究に基づいて、東と西、仏教と西欧との出会い、そういう観点から、普遍的なユマニズムの可能性というものについてお話をいただけるのではないかと思います。では、よろしくお願ひします。

今枝 いま紹介いただきました今枝です。朝比奈先生とはフランスで最初にお会いしてから長いつき合いということで、僕は明治学院大学とは何の関係もありませんけれども、今日ここに呼ばれてお話しすることになりました。そして、講題として「星の王子さまとダライ・ラマ十四世」、副題として「ユマニストの系譜」ということを出しました。

引き受けてから、このテーマを決めて、僕の知っている数人に案内を出したところ、その中の一人から「こんな二つが、どうして結びつくの？」という質問をいただきました。僕も最初は結びつけられるとは思いましたが、本当に結びつくのかどうか、ちょっとおぼつかなくなってきたところがあって、今日の朝までどうやって結びつけようかな、と考えていました。

まずは『星の王子さま』というの皆さんご存じだと思います。サン・テグジュペリの世界的な古典作品で、日本でも岩波書店から出版された内藤濯あかつらという人の訳でよく知られています。さらに、最近になって十以上の新しい訳が出て、読まれています。これは、後で少し内容を紹介します。

ダライ・ラマ十四世というのもメディアで、特に今チベット問題があつて、亡命チベット政府の政治的及び精神的指導者ということでも知られています。もう少しさかのほれば、一九八九年度のノーベル平和賞受賞者であるということでも知名度は高いですね。著作もかなりあつて、日本語にも幾つか訳されています。多分一番知られていないのは、ユマニストという言葉でしょう。これはフランス語ですが、日本ではその英語版であるヒューマニスト、あるいは主義としてのヒューマニズムが知られています。いずれにせよ、日本で最初にユマニズムを紹介したというか、日本にそれを広めるのに最も功績のあつたのは、フランスの中世を代表するラブレールの『ガルガンチュワ物語』五冊を日本語に訳した渡辺一夫という東京大学の仏文の教授です。

その彼が、これは一九六四年ですから、今からもう半世紀ほど前に書いた本があります。ところが、その表題にも『私のヒューマニズム』（講談社現代新書6）と英語の用語が使つてあります。このことに関して、著者は、私としてはユマニズムというフランス語の言葉を使いたかつたけれども、日本では英語のヒューマニズムという用語が定着してしまつていて、一般向けに出す本としてはユマニズムではわからないから、ヒューマニズムにせざるを得なかつた、ということを説明しています。まさにそのとおりで、フランス語のユマニズムもユマニストも、日本ではほとんど知られておらず、英語のヒューマニズム及び

ヒューマニズムという言葉が通っています。そして多くの場合、日本語では人道主義(者)とか人文主義(者)という訳語が当てられていますが、それはけっしていい訳語ではありませんし、その解釈はユマニスム、ユマニストという、本来ヨーロッパで発生した動きというか思想をほとんど伝えていません。

例えば偶然に今日見つけた本の中で、ヒューマニズムという言葉を使っている文章を見つけました。これは高校の教科書ですけど、それに注が打ってありまして、humanismとローマ字で英語の原語が書いてあり、「人間の尊重と解放を基調とする主張」と説明してあって、人道主義という訳語が挙げられています。

しかし、日本語で人道主義といったときは、むしろ英語のhumanismを指すべきことであって、humanismの訳語として人道主義を用いるのはけっして適切ではありません。ですから、渡辺一夫は人道主義という用語は絶対に避けたいと言っているのですが、ユマニスムが英語のヒューマニズムで知られているとなると、どうしても人道主義になってしまいます。しかし、人道主義とユマニスムとは、本質的に違うものだと思います。いい訳語が見つからないのですが、ユマニスムを強いて日本語に訳すとすれば、いわゆる経済至上主義とかに對しての「人間至上主義」、あるいは金本位制という経済用語にならって、「人間本位主義」といったところでしょう。このくらいの言葉でしか訳しようがないでしょう。いずれにせよ、人道主義というの

はヒューマニズムのことではなく、フランス語でいうユマニスムというのは決して人道主義とは訳せないものです。

そのことを一言説明しておいて、それでは渡辺一夫が紹介しようとしたユマニスムというものはどういうものかといいますと、彼はこういう定義を与えています。「ユマニスムとは堂々たる体系を持った哲学理論でもなく、先鋭な思想でもないようである。ユマニスムとは私たちが何をするときでも、何を考えるときでも、必ず私たちの行為や思想に加味されてほしい態度のように思う」と。ユマニスムは、非常に漠然としたことです。そして、非常に平易な、たやすいことです。

それをさらに別の箇所では、彼はこう説明しています。「このヨーロッパ語の語源問題からすれば、明らかにヨーロッパのものですけれども、内容的には恐らくどの国でも、人間の名に値する人々、心ある人々ならば当然心得ているはずの、ごく平凡な人間らしい心がまえだと考えています。儒教や仏教の伝統によつて築き上げられた東洋文化の中にも、必ずユマニスムに該当するものが、それ相当の言葉によつて示され、しかるべき相当の人々によつて抱かれているに違いありません。そして、それは何々主義というような訳語ではびつたりしないと感じられるほど、人間の平易な心がまえにはかならないような気がいたします」。

これが渡辺一夫が挙げている定義です。ですから彼は、起源としてはヨーロッパの中世にあった思想というか、動きではあ

るけれども、それは普遍的であって、地域に限定されない、時代にも限定されないもので、必ずや儒教や仏教の伝統の中にもあったに違いないということを言っています。なによりも彼は、ユマニスムは平易なものであるということを大原則として挙げています。

このユマニスムという一つの思想、態度というのは、現在のフランスでは、一つの基本的な価値基準として非常に強く意識されています。例えば、そんなに新しい例ではありませんが、二十世紀後半に一世を風靡した哲学者サルトルは、自分の思想が *Existentialisme*（実存主義）という名前をつけられて新しい思想体系とみなされたときに、『実存主義はユマニスムである (*L'existentialisme est un humanisme*)』という講演をしています。（講演原稿は、同名の単行本として出版されています）

それはなぜかという点、ユマニスムという伝統が生まれて以後のヨーロッパ、特にフランスにおいては、あらゆるものの基本としてユマニスムというものがないとだめだというのが大前提になっています。ですから、サルトルのような哲学者も、そういう問い、すなわち自分の思想体系が本当にユマニスムなのかどうかを問題にします。それで、自分はユマニストであることを証明しようとします。それがゆえに、そういう本を書いたわけです。

もっと新しいところでは、ちょうど僕の勤めているフランス国立科学研究センターの若い女性研究員で、カテル・ベルト

ロ (Karell Bertelot) という人が書いた『一神教は果たしてユマニストたり得るか (*Le monothéisme peut-il être humaniste? Fayard, 2006*)』という興味深いタイトルの本があります。ヨーロッパの伝統の中での一神教といった場合には、必ずユダヤ教とキリスト教、そしてそこからさらに後に出てきたイスラム教、この三つですが、これらの *monothéisme*（一神教）は、果たしてユマニスムたり得るかという疑問です。

それはなぜかという点、二〇〇一年にアメリカで起きた九・一一同時多発テロ以来、宗教の名のもとにおけるテロ、そしてそれに対するテロ対策という闘争が続いています。それが、キリスト教対イスラム教という対立の形を取っています。また、中東ではユダヤ教とイスラム教との対立があります。こうして一神教三兄弟が対立し合っている現状を前にして、果たして一神教はユマニストであり得るかという論考です。

その結論は、一神教はユマニストであり得る、です。だけれども、そのためには五つの条件がある。彼女は結論として、その五つの条件を列挙していますけれども、それが非常に厳しいものです。現在のキリスト教にとっても、その五つの条件を満たすことはきわめて難しいと思えるくらいに厳しい条件です。となると、五つの条件を満たせば、キリスト教もユマニストたり得るけれども、かなり難しいというのが、僕が受けた印象です。この本は、かなり批判的なものですが、フランスのようにキリスト教、特にカトリックの伝統が今でも強い国で、そうい

う見方が出てきているというのが現状です。

それは一つ置いておいて、いま問題にしているユマニスムという流れというか、物の考え方、あるいは人間としてのあり方に關して、今日は、僕が見て、その代表的と思われるサン・テグジュペリの『星の王子さま』を取り上げて話をします。

それと、渡辺一夫は、ユマニスムに關して、東洋の儒教や仏教の伝統の中にも、しかるべき言葉で、しかるべき思想が抱かれていたに違いありませんと言っています。しかし、彼は東洋の専門家ではありませんでしたし、東洋の伝統を紹介することが彼の目的でもありませんでしたから、殊さら具体例を挙げていません。そこで、ユマニスムの東洋における一例として、ダライ・ラマ十四世を取り上げたいと思います。時代も異なりませんが、場所も異なりますが、そこには一脈の地下水のような、一つの共通した人間としてのあり方があるのではないかというふうに話の筋を持つていきたいと思えます。しかし、果たしてどういふふうにつながりかというのには、僕自身わかりません。

最初に取り上げるのは『星の王子さま』です。これは非常に平易な文体で書かれた短い作品ですが、ある面では非常に難しい、深い作品だと思います。つい最近の訳者の一人であり、本人も作家である池澤夏樹が、この作品は、いわゆる散文で書かれているけれども、実は一篇の詩であり、詩というのは読んだところでわかるものではない、一度読んで、二度読んで感じるところがあるような深いものだと思いますが、確か

にそうだと思います。

文学作品としては詩に近いものの中から、ある事柄を取り上げて、それを論じるというのは、ある面では逸脱したこともかもしませんが、それなりに汲み取れるメッセージはあると思います。その中で取り上げたいのは、星の王子さまとキツネとのやりとりです。その中にユマニスムの典型といえるようなものがあると思います。この二人の出会いというのは、星の王子さまは、自分の星から地球に来て、砂漠の中にいます。そこでキツネがあらわれると、星の王子さまが「ぼくと遊ばないかい？ ぼく、ほんとにかなしいんだから……」と頼みます。ところが、キツネは「おれ、あんたと遊べないよ。飼いなさらされていらないから」と答えます。

この「飼いなさらす」という言葉が最初のキーワードです。フランス語では *apprivoiser* で、普通には、野生の動物を飼いなさらすという意味で使われています。資料としてお配りした中の一ページ目の上の方にフランス語の原文が載せてあって、その下に日本語訳が十ほどありますけれども、ほとんどの訳者が「飼いなさらす」と訳しています。動物を飼いなさらすときの訳語としては問題ありませんが、キツネも人間扱いして、一緒に遊ぶ関係ですから、星の王子さまを主語にする場合には「手なずける」、両者を主語にする場合には、「(お互いに)なつく」といった言葉が一番いいと思います。

いずれにせよ、星の王子さまはキツネに、「(飼いなさらす)って、

それどういうことなの？」と聞きます。するとキツネは、「(きずなを作る)」ということだよ」と答えます。この「きずな(フランス語では *fil*)」が二つ目のキーワードです。きずなができていない二人の間には何の関係もなく、キツネと王子は遊べません。ですから、遊ぶためには、王子がキツネを手なづけ、その結果、二人の間にきずなができなくてはなりません。そうして、きずなができたなら、はじめて遊べるようになります。そこで、キツネは、どうやってきずなを作ったらいいかということとを説明しますが、きずなはすぐにできなくて、そのためには忍耐が必要だよ、と教えます。

手なずけて、きずなができたかどうかというのと、それが資料の二ページ目にあるキツネの言葉で、「きみは、自分が手なずけて、きずなを作った相手にたいしては、いつまでも責任がある (responsible)」ということとです。きずなができたものの中には、お互いに責任があり、それも、ただ一時的な責任ではなくて、永遠の、永久の責任です。これは日本語ではほとんどすべて、「責任がある」とか、「責任を持たなければならない」と訳されていますが、この「責任」という言葉が、『星の王子さま』という作品の中で最も深いメッセージを伝える三つ目のキーワードだと思います。著者サン・テグジュペリは、キツネの口を借りて、人間関係の最も基本的なことを、この三つのキーワードで、星の王子さまに教えているのだと思います。

ここでひとまず、『星の王子さま』の世界を離れることにし

ます。責任という言葉が出ましたが、おもしろいことに、ダライ・ラマ十四世が、最も力を入れているメッセージの一つに「普遍責任」があります。これは、本来の仏教用語ではありません。日本語でも「責任」という言葉・概念自体が、儒教とか、あるいは欧米の思想が入ってきてからの、近世になってからのものでしょう。ダライ・ラマ十四世の著作はチベット語でも出版されていますが、ほとんどは最初から英語で用意されます。ところが、「普遍責任」に関しては、チベット語の「チ・セム」という言葉から、英語の *universal responsibility* という表現を考案したと述べています。

これは仏教のお坊さんというか、僧侶としては非常に珍しい言葉の使い方です。責任という言葉は、現在では社会的なコンテキスト(文脈)、ことに契約の中で使われることが多いのですが、ダライ・ラマ十四世は、それを仏教の観点から見ても、一番大切なことだと言っています。これは非常に意味深長なことです。

その根拠ですが、彼には、なぜ *universal responsibility* (普遍責任) というのが今の世界にとって最も重要かという、れっきとした理論づけがあります。渡辺一夫は、ユマニスムは、平易なものであって、仰々しい体系ではないと言っています。しかし、ダライ・ラマ十四世は、二千五百年の伝統を持つ仏教、しかもインド由来の最も正当な仏教を受け継いでいるチベット仏教の最高指導者として、やはりその二千五百年の体系から離れ

て、ぼん、と、こ、う、い、う、新、し、い、言、葉、は、使、え、ま、せ、ん。そ、れ、で、彼、は、や、は、り、説、明、し、て、い、る、わ、け、で、す。ど、う、し、て、だ、れ、に、と、つ、て、も、「普、遍、責、任」(universal responsibility)があるのか。

これが非常にももしろいことで、『星の王子さま』に出てきた二つ目のキーワードである「きずな」につながっていくわけです。ダライ・ラマ十四世は、仏教の論理というか体系の中で話をしていますから、用語の問題は難しいのですけれども、この「きずな」に当たるものは、日本語でいう「縁」、日本語読みすれば「えにし」です。現在一般的には、我々は一人一人が個人として独立して存在しているように思っています。しかし、実際には誰一人独立して、孤立して存在している者はなく、だれにでも父親、母親があり、さらには兄弟、姉妹がいたり、親戚がいたり、いろんな意味で縁者があり、つながっています。それが、仏教の世界観からすれば、長い輪廻の間繰り返されますから、人間は誰でもお互いにきずながあります。ですから、お互いに責任がある、全員に「普遍責任」がある、という論理です。

『星の王子さま』では、出会いがあつて、お互いがつながつて、初めてきずなができ、そこからなつた者同士に責任が生じる、という論理でした。しかし、ダライ・ラマ十四世は、きずなは生まれながらのものであり、その結果としての責任も生まれながらに誰にでもあるのだと主張しています。ですから「普遍責任」です。両者のきずなの捉え方に違いがありますが、きず

なから責任への道筋は同じです。

そのきずなですが、これは仏教でいう縁起です。これは全く正当な仏教用語であつて、二千五百年前の仏教の開祖である釈迦牟尼が使った言葉をそのまま忠実に今に伝えていきます。ただし、現在の一般的な日本語では、縁起というと、「縁起が悪い」とか、結婚に関して「良縁」、「縁がない」といったくらしい次元に縮小されて使われています。

ところが、本来の仏教の文脈では、「縁起」というのは、文字通り「縁つて起きる」ということで、独立して存在する現象は一つとしてなく、すべては何かに「縁つて」生起している、という相互依存関係を表しています。人間もその例外ではありません。それ故に、人間に限らず、すべての生き物というのは、相互に縁り合つていて、一人では存在していない以上、全員がお互いにつながつていて、責任がある、というのがダライ・ラマ十四世の「普遍責任」という概念です。

この点でいえば、ダライ・ラマ十四世のほうが、『星の王子さま』の著者が考えているよりもずっと広い次元にあると言えるでしょう。『星の王子さま』のキツネと王子は、初めて出会つたわけで、その時点ではお互いに関係がなく、どちらかがどちらかを手なづけないと、きずなが生まれません。しかし、ダライ・ラマ十四世の立場からすれば、初対面であれ、だれであれ、すべての現象はお互いが縁りかかり合つてしか存在していない以上、殊さら一回ごとに手なづけ、あるいは飼いならす、といっ

たことは必要ないわけです。それはなぜかという点、仏教で縁起と言うときには、人間だけのことに限らず、人間も含めて、畜生すなわち動物もすべて含まれています。その意味で、ものすごく広いと言えます。『星の王子さま』の中では、王子と擬人化されたキツネとの二人の間で成り立っていますから、ある面ではサン・テグジュペリも動物の世界まで広めているかもしれません。しかし、彼はそれをはっきりと意識はしていません。それが一つです。

それからもう一つ、仏教徒としてのダライ・ラマ十四世の意識にあるのは、今ここで出会った関係、きずなだけではありません。人間も含めて、すべての生き物というのは輪廻転生を繰り返していますから、いま生きている間に会ったことだけが重要なのではなく、それが過去にまで遡るといふ、時間的な広がりもあります。

それを最も典型的にあらわしているのが、今度は、同じく仏教徒でも、ダライ・ラマ十四世とは全く関係ない、日本のお坊さんで、浄土真宗の開祖親鸞です。弟子の唯円が親鸞の言葉をまとめた『歎異抄』という短い本があります。その中の一節にこういう言葉があります。そのまま引用しますと、きれいな文章で書いてあるのですけれども、「一切の有情はみなもつて世々生々の父母兄弟なり。(中略)まず有縁を度すべきなり」。

これはどういふことかといえますと、すべての有情(生き物)は、かつて「世々生々の」輪廻を繰り返している間に、何らか

の関係、ひよっとしたら父であったかも知らない、母であったかも知らない、あるいは自分が子供であったり、さらには兄弟であったかも知ない、姉妹であったかも知らない。一般の人が生きているときの記憶にはないかもしれないが、輪廻という、仏教徒にとつての真理の観点からすれば、今あるといふことは、前世があつて、その前世のまた前世があつて、その一世代ごと、一生ごとに必ず何らかの人間関係があつたわけです。そういうことからすれば、今ここで初めて会つた面識のない人も、ひよつとすると、過去世で自分の母だつたかも知らない、あるいは自分の弟だつたかも知らない、といふ見方です。

親鸞の弟子の中にも、まずは自分の身近な人を救うべきだと言う人がいました。いっぱい人がいるから、みんなは救えない、だから、まず身内を救つて、といふことです。そのときに親鸞は、「私は父、母あるいは兄弟を救おうと思つて念仏を唱えたことは一度もない。それはなぜか」といふと、今の父母兄弟だけが大切なのではなく、全員同じである。それゆゑに、まずは有縁、すなわち今現在つながりのある人、きずなのある人を救うべきであつて、肉親を優先するといふのは間違つた考えである」といふことを言っています。

ダライ・ラマ十四世は「普遍責任がある」と言いますが、親鸞が、自分の父母を助けるといふことではなくて、まずは有縁、すなわち縁、きずなのある人すべてを救うといふのも、同じ考え方です。自分の身内だけを救うのであれば普遍ではあり

ません。それは個人的な次元です。いずれにせよ、親鸞という八〇〇年以上も昔の鎌倉時代の日本のお坊さんが言っていることも、今のダライ・ラマ十四世が言っていることも、ある面では仏教徒からすれば当然のことです。こういう意味で、おもしろい一つのバラレルのようなものがあると思います。

渡辺一夫は、ユマニスムは、儒教の中にもあるはずだ、あつたはずだと言っています。これに関して、どうしても儒教の例証を挙げたいわけではありませんが、日本でもよく知られている言葉に、「天網恢恢疎にして漏らさず」という言葉があります。原文ですと、「天網恢恢、疎而不失」です。

この言葉は、儒教ではなく、道教の開祖の老子（紀元前五世紀頃）の言葉を集めた同名の『老子』という書物の中に出てきますが、天網は、天の下にあるものすべてを覆う網で、恢恢というのは、その網が至るところを覆っているということで、まさに普遍です。その網の特徴はというと、目が粗く、拘束することはないけれども、「不失」すなわち「漏らさない」ということです。

老子が言ったことは、世の中には、必ず正義があつて、その正義の感知・監視網といったものが、全宇宙を覆っている、だから、だれがどんな悪いことをしたところで、それは見逃されない、必ず悪いことは正されるという考え方です。事を行うときに、例えば、警察に捕まらなくても、天網は見逃さない。それは一人一人に対して、悪事はやはり悪事であつて、それが罰

せられる、罰せられないといった社会的次元とは異なるモラル、倫理を述べています。

この思想に通じる考え方は、日本にもあつて、例えば世の中で悪事が犯されると、「お天道様はちゃんとお見通しで、お天道様の罰が当たる」といったことです。

このことに関連して、日本の浄土真宗系の妙好人法話の一つを紹介したいと思います。ある盗賊の親分と子分がいます。その二人が、夜、盗みに入ります。親分のほうが、盗みがすべてうまくいって、だれにも見つからずに所期の目的を達成した後、子分に向かつて「今日は首尾がよかつた。だれにも見つからなかつた」と言います。で、「だらう？」と相棒に念を押すと、子分は「うん。だけど、お月様が見てござつた」と答えます。泥棒の親分は所期の目的を達成し、だれにも見つからなかつたから、捕まらない、と考えています。ところが、子分は「お月様が見ていた」と言いますが、お月様が見ていたところで、月に逮捕されるわけではないので、親分とはまったく異なつた次元です。

日本の仏教にも、あるいは中国の儒教や道教の伝統の中にも、人間社会で罰せられる云々とは違う次元で、人としてすべきことがある、という一つの普遍的倫理があつた、ということがわかります。そしてそれは、チベットのダライ・ラマ十四世の言葉、フランスの『星の王子さま』の中に出てくるキツネの言っていることに通じるものがあると思います。

今しがた、天網という言葉に触れましたが、その天網が、普遍的なものということで思いつくのは、今だったらだれだって知っている、いわゆるWeb（クモの巣）です。特にwwwと略されるWorld Wide Webすなわち「世界にまたがるクモの巣」です。これは、老子の言う天網とはまったく違うものであると同時に、まさに老子の言っている天網そのものでもあり、おもしろいつながりがあるかなと思っています。

それで、Webという言葉から。また連想というか、発想がつながるのですけれども、*The Web of Life* という英語の本があります。直訳すれば、『生命のクモの巣』ですが、『生命の天網』と訳するのがいいかと思います。その著者は、日本ではほとんど知られていないフリッチョフ・カブラ（Fritjof Capra）というアメリカの物理学者です。この本は一九九六年に書かれた本で、フランス語訳は二〇〇三年に出していますが、僕の知る限り日本語訳は出ていません。

このカブラという著者ですけれども、日本語に訳されている本が教冊ありますが、その一つが『タオ自然学』（工作舎一九八〇年、改訂版 一九九〇年）です。タオというのは道教の「道」で、英語の原題は *The Tao of Physics* です。「現代物理学の先端から『東洋の世紀』がはじまる」というおもしろい副題がつけてあります。今取り上げるのは、その同じ著者が一九九六年に書いた本ですけれども、彼は物理学者の観点から今の世の中を見ています。そしてその中に、『星の王子さま』

や仏教で言われていることと全く同じような見方が出てきます。彼は、「すべての原則は、相互依存である」と述べています。この相互依存は、まさに「すべての物事はお互いに縁って起きる」という仏教の「縁起」そのものです。

彼はこう述べています。「一つの生態系を構成するすべての要素は、巨大で複雑に絡み合った関係のネットワーク、すなわち生命の天網の中でお互いにつながり合っている。すべての構成員にとってみずからの本質、実際にはみずからの存在そのものは、他の構成員との関係から導き出されるものである。相互依存、すなわちすべての生の営みがお互いに他者に依存し合っているということは、すべての生態的関係の特質である。生態系のあらゆる生き物の活動は、他の多くの生き物の活動に依存している。それゆえに、共同体全体の成功は個々の構成員の成功に依存し、個々の構成員の成功は共同体全体としての成功に依存している」。

これはまさに仏教が二千五百年前から言っていることです。すべての現象は、あるものに縁って、すなわち依存してしか起きない。何かに縁って起きている以上、すべては絡み合い、結びつき合っている。現在の物理学者の見方と、二千五百年前の釈迦牟尼の見方は、まったく同じです。そして彼は、物理学者として見ると、今の世の中はまわがっていると指摘しています。それはどういふことかと言いますと、別の箇所ではこう述べています。「私たちは抽象思考能力により、自然環境——す

なわち「生命の天網」——をあたかも私たちの利益のために採取できるさまざまな要素とみなすようになってしまった。さらには、世界を構成要素に分解するという見方を、人間の社会にも適用し、国家、人種、宗教、政治集団といったものに分割している。私たち自身、私たちの環境、そして私たちの社会の实体を、こうした分割された要素であると思ひ込むことによつて、私たちは自分自身を自然全体から、そしてみずからの同類から切り離してしまい、次元の低いものにしてしまっている。十全な人間性を取り戻すためには、私たちは生命の天網とのきずなを結び直さなければならぬ。きずなを結び直すこと（ラテン語で *rejo*）は、深い意味でのエコロジーの精神的礎の本質そのものである」。相互依存から、きずなが問題になっていきます。彼は、人間性を取り戻すために最も大切なことは、生命の天網、いわば普遍的な次元とのきずなを結び直すことだと主張しています。「結び直す」というのは、ラテン語で *rejo* で、これが *rejo*（宗教）の原語です。しかし、宗教の場合は、人間と神のきずなを結び直すのですが、この物理学者が言っているのは、そうではなくて、人間に限らず、生態系の中で生の営みを行っているあらゆるものの相互のきずなを、普遍的な天網のレベルで結び直すということです。

ここでまたダライ・ラマ十四世に戻ります。彼はチベット仏教の最高権威、最高指導者として世界的なメッセージを発していますが、最近になって、「宗教の時代はもう終わりました。

私は、チベットという仏教国家に、仏教の修行しかなかった一九三五年に生まれました。ですから、私はその伝統を守っています。しかし、時代は変わりましたし、私も亡命して、今まで様々な世界を見てきました。その結果言えることは、宗教だけが、あるいは今の形態の宗教だけがいい、あるいはそのほうがいいということは言えないということです」と述べています。彼が提唱していることは、日本語に訳した場合、非宗教的と言ふよりは、超宗教的態度あるいは次元といった方が適切でしょう。要は、宗教という既成の枠を超えた次元での精神性を促進することが最も大切であつて、そのためには必ずしも宗教である必要はない。仏教である必要もなければ、キリスト教である必要もない。人間は、お互いにきずながあつて、責任があるという認識を高め、精神性を促進すること、それを彼は精神革命と呼んでいます。これは、社会運動といった、外に働きかけることではなくて、各自一人一人の内面で行うことです。一人一人がこの精神革命を起こすことこそが、あらゆる問題の根本的な解決になるということを述べています。

彼は、お坊さんでありながら、そしてその下には何百人、何千人という独自の僧侶がいるにもかかわらず、チベット仏教のこの形態が一番いい、あるいはこの形態だけがいいとは思わないう、と述べています。大切なことは、超宗教的な精神性を高めることであつて、そのためには精神的な革命を起こす必要がある。そしてそれは、国、社会、集団とかいったレベルではなくて、

各人各人一人一人のレベルで起こす必要がある。だから、一人一人ができることである、と同時に一人一人がしなくてはならないことである、というのが、彼の十年來のメッセージの基調にあります。

そこで、一人一人のレベルになると、星の王子さまとキツネの關係が思い浮かびます。人間は普通、人と出会うときに、初対面だとか面識がないということを行います。しかし、その認識のレベルを超えて、もっと深く広い、普遍的な次元で考えると、全員がそもそもつながり合っていて、依存し合っているという關係が認識できます。ダライ・ラマ十四世は、一人一人が、この認識をはつきりと持つことが、最も重要である、と述べています。

星の王子さまから始めて、チベットのダライ・ラマ十四世、日本の仏教者親鸞、中国の思想家老子、あるいは現代アメリカの物理学者と、様々な人たちのものの方を見方をざっと通覧してきましたが、言葉面ことばづらといった表面的なレベルではなく、深いところで共通するものが見い出せると思います。

最初に紹介した渡辺一夫に戻りますと、彼は、ユマニズムを日本に紹介するにあたって、こういうことを言っています。ユマニズムがフランスで生まれた当時のフランスは、カトリックの神学、特にソルボンヌの神学部で代表される權威が、神という、本来、人間にとつてよくあるはずのものとの名のもとに、人間をむしろ苦しめていました。その典型が、宗教戦争で

す。ですから、心ある人たちは、そうした風潮に対して、「それが、本来、人間にとつて善であるはずの神と、何の關係があるのか」ということを問い始めました。その代表が、ラブレールで、彼はソルボンヌの神学部からいらまれて、著書も発禁本にされて、亡命して身を隠さざるをえなくなりました。それがルネサンスの時代で、より人間的なものをつくる一つのきっかけになったわけです。それから、既に三百年、四百年のユマニズムの伝統があります。渡辺一夫が『私のヒューマニズム』を書いたのは一九六四年で、第二次大戦が終わって二十年程が経過した時ですが、なぜこの時にフランスのユマニズムを紹介したかという理由は、彼は直接には書いていません。しかし、当時の時勢からして、僕はこう推測しています。

既に半世紀も前に書かれた文章ですが、この文章は今の時代にも当てはまります、あるいは今の時代にとつてこそもっと深い意味を持つていると言えるでしょう。彼は、「現代は、あなたもご存じのように、機械文明が発達し、科学万能の夢が十九世紀以上に人々をとらえ、人間の集団生活の方針が険しく対立する二つの制度に分かれ」と書いています。この「二つの制度に分かれ」というのは、一九六〇年代の冷戦時代のことで、これはもう現在には該当しませんが、そのほかは二十一世紀になつた今の時代の方がぴったりします。そして彼は、「あらゆるところに人間不在、人間疎外の現象が見られます。それゆえにこそ、それは人間であることと何の關係があるのかという問

いが、特に強く発し続けられなければならないと私は思うので「と記しています。これが、渡辺一夫が『私のヒューマニズム』を書いた最も深い理由だと、僕は思います。

つまり、第二次大戦が終わって一九六〇年代になり、いわゆる機械文明あるいは科学万能主義が謳歌され、さらに今の時代でいえば経済至上主義が加えられると思います。渡辺一夫が言っている現代ではなくて、今の二十一世紀の現代というのは、機械文明の発達、科学万能の夢、それから経済至上主義というものの中で、人間不在、人間疎外という現象がますます強くなり、その弊害が様々な形で顕在化しています。渡辺一夫が五十年前に書いた文章というのは、まさに今の時代にこそ当てはまる、あるいはもっと深く問いかける文章だと思います。それが、僕が個人的にユマニズムということに興味がある主な理由です。渡辺一夫は「人間は所詮滅びるものかもしれない。しかし、抵抗しながら滅びよう」というセナンクール(Senancour)という十九世紀の作家の、一見するとちよつと弱々しい文章を引いています。そして、

「この『抵抗』は何によってできるのでしょうか。少なくとも筋力だけでも権力だけでも完全に行われるものではありません。むしろ、

『それは人間であることと何の関係があるのか』

と問いかける人間の心根——この平凡で、無力らしく思われる心がまえが中心とならなければならないかと思われま

す。この心根、この心がまえをあえてユマニズム、あるいはヒューマニズムと呼んではいかがであろうかと、わたしは考えております」

と書いています。

日本でのユマニズムの紹介者であり、自らユマニストであった渡辺一夫は、「あらゆるところに人間不在、人間疎外の現象が見られ」始めた一九六〇年代の日本で、「それは人間であることと何の関係があるのか」と問い続けた人です。それは、ダライ・ラマ十四世にも言えることでしょう。彼は、「私のような一宗教者、一人の坊主が、世の中のことを変えることはできない。しかし、変えられないからといって、黙っているわけにはいかない」と言っています。彼もやはりユマニストです。

歴史的にはルネサンス期のフランスで発生したユマニズムですけれども、その発生以前に既にインドにもあつたし、中国にも、さらには日本にもありました。最近の日本にも渡辺一夫のようなユマニストがいました。しかし、悲しいかな、渡辺一夫自身が認めているように、ユマニズムが非力であることは確かです。ユマニストは、武力をもって世の中を変えらるゝことはできませんし、できません。ですから、弱いといえれば弱いんですね。

ダライ・ラマ十四世は、平和を達成するためには、平和にとつて害のあるものはつぶさないとだめだという、その論理自身が間違っている、と主張しています。要は、平和をつくるという

ことは、まずは自分が平和であることであり、自分がまず平和であることが、平和を達成しようとする人の出発点でないとはだめである。なのに、平和を達成するために、武力を使うということは、最初の出発点そのものが崩れることである。私の立場として、中国がいかに間違っていたところで、暴力で訴えるということは絶対にできない、という立場です。ガンジーに代表される非暴力主義を貫いています。それに対する評価がノーベル平和賞であり、ダライ・ラマ十四世は、やはりこの立場を崩さないし、崩せません。

人間的なものを求めているユマニストである以上、人間的なものを守るために、非人間的なものに対抗するために、非人間的に行動するということはあり得ません。ですから、洋の東西を問わず、時代の古今を問わず、ユマニストあるいはユマニズムといふのはものすごく非力なものだと思います。

しかし、渡辺一夫が言っているように、ユマニスト的態度は、人間として人間らしく生きる上においては、やはりだれもが持つていてほしいものです。彼は、そう願っています。願ったところで、他の人たちがそう行動するかどうかは別であり、それは強制できるものではありません。けれども、僕個人的には、そういう見方をして、そういう活動というか、生き方をしていった人が、つい最近の日本にもいたということは、やはり非常にうれしいことです。

これで、話を何とかつなげられたかと思いますが、判断は皆

様にお任せするほかありません。あと質問とか何かあれば、それにお答えするという形で話を続けられますけれども、どうでしょう。

質 疑

朝比奈 本当におもしろいお話をありがとうございます。質問ということですが、まだ時間がありますので、何でもお気軽にどうぞ。いかがでしょうか。

質問者A 先日ブータンに行ってきたまして、インターネットで今枝先生がこちらでお話しされるということを知り、来ました。おもしろいお話をありがとうございます。先ほど「抵抗しながら減びよう」という言葉がありました。非力であるということですから、ユマニズムを広げていって、よりよい方向に行くということ、減びるといふのは、ちょっと相反するものじゃないかなと思うんですけども。

今枝 もう一度言ってください。

質問者A ユマニズムを広めて世の中をよりよくしていくというのと、減びるといふのは相反することかなと思うんですが、非力ながら世の中をよりよくしていくというユマニズムの方向性というのは、どうなんでしょうか。上手に言えなくて、質問の意図が伝えられないかもしれませんが、減びようというの

は、ちよつと寂しいなと思つたんですが、そのあたりはいかがでしょうか。

今枝 講演ではブータンのことには全然触れませんでしたけれども、人として、仏教徒として、ユマニストとして現時点で最も代表的なのは、僕はやはりダライ・ラマ十四世だと思います。しかし、キリスト教系の宣教師のように、そうしないのだめだと他人に働きかける態度はユマニストには一切ないですね。みずからそう努めるということだけであつて、それ以上は、ありません。それはなぜかという、広められないというか、それもやはり仏教の一つの伝統だと思います。

開祖である釈迦牟尼の伝記の中の一節にありますけれども、釈迦牟尼の最初の弟子の一人が釈迦の教えに感銘を受けて、自分も出家してお坊さんになります。その彼が「これから教えを広めに行く」と言つたときに、教師である釈迦牟尼は止めました。「それはだめだ。むしろ行つてはだめだ」と。その弟子が「それはどうしてですか。私はこういういい教えに会つて、本当によかつたと思つて、ちゃんと出家もして、教えに従つて生きています。どうしてこれを人に伝えてはだめなのですか」と問いました。

釈迦牟尼が言つたのは、自分のほうから行くべきものではない、もしあなたが私の教えが本当にすぐれた教えだと思つて修行しているのなら、それは外の人が必ずや気づくものである。例えばあなたは毎朝^{こつじま}乞食に出るが、そのときに、一般の人から

「どうしてあなたは輝いているのか」「どうしてあなたのしぐさには落ちつきがあるのか」、それを問われたときに初めて、私はいかに人の教えで、こうしているからだと思つとは思つてもいいけれども、こうしたらこうなるから、あなたもこうしろと言ふことは、すべきではない、ということですよ。禁止とまではいかないけれども、しようとしたときには、必ず止められている。止められている理由は、そういうことです。本当のものであれば、自分のほうから伝えるものではない。非常に難しいところですよ。

それから、釈迦牟尼の伝記の中に、晩年の逸話が一つあります。それは、自分の弟子であり、自分の教えを請ひに来ている王様がいますが、その王様が隣の国に戦争を仕掛けます。その隣の国というのが、釈迦牟尼の生国なんです。釈迦牟尼は、自分の教えを聞きに来ている王様が、自分の生国を滅ぼしに軍隊を率いて行つた、との知らせを受けます。

そこで釈迦牟尼は、王が通る道にただ一人で座りました。王は、釈迦牟尼が座っているのを見て、引き返しました。二度目も引き返しました。しかし、三度目は無視して通り過ぎました。そして、釈迦牟尼は自分の生国は完全に滅ぼされたこと知らされます。王が凱旋して戻ってきますと、釈迦牟尼がまた同じ道に座っています。そのときに、国王は一言も釈迦牟尼に言葉をかけませんでした。付き人の一人が「さつきは道の真ん中に座っていたが、どうして今度は木陰に座っているのか」と聞くと、

釈迦牟尼は「親族の陰は涼しいかな」とだけ答えました。

実際に、釈迦牟尼は、行きに国王を止めようとして座っていたときは、道の真ん中の日の当たるところに座っていました。ところが、帰りには、道の真ん中ではなく、道端に座っていました。その道端というのは、木が植えてあって、その木陰に座っていたのです。それで、「親族の陰は涼しいかな」と答えたのですが、ちよつと意味が分かりにくいと思います。それはどうということかといえますと、日差しが強いところに座っているよりは、木陰に座っているほうが気持ちがいい。木があり、木陰があるということがいいことだ。それは人間関係に例えると、親族というのが、木である。私には、もはや父親はいなくなつたけれども、いとことか、親戚はさつきまでいた。その親戚がいま全員殺されて、私にとつてはもはや木陰を作つてくれる木がない。その悲しみを表現しているわけです。

婉曲的な譬えで、ちよつとわかりにくい表現ですけども、もう一つ言わんとしていることは、結局、非暴力では、暴力は止められない、という悲しさでしょう。仏陀が、いかにそれはだめだと言つたところで、する人はする。しかし、止めるのに武力を使ったのでは、やはり本末転倒です。ですから、暴力はやはり使えず、非力であるより仕方がありません。そのことの悲しさをも表現しているのだと思います。それでも、こうした非暴力のメッセージは、非力ながらも、やはり届くところには届きます。それは、全体の中で、ごく少数の人でしかないかも

しませんが、そういう性質のものだと思います。

ダライ・ラマ十四世は、まさにその一人で、現代の最もすぐれたユマニストだと思います。国のレベルで言えば、そのあり方からして、ブータンがそれに当たるのではないかという気がします。ブータン人は、ほかの世界に向かって、「仏教徒でないのだめだ」ともことさら言いません。「幸せになりたかつたら、私たちのようになれ」と主張しているわけでもありません。ただ、自分らの信念が一つあり、それは崩しません。だから、ブータン人はやはり国を挙げて抵抗しています。経済至上主義、科学万能主義、それから欧米中心主義といったものの前に抵抗しています。だけど、それらを阻止するために武力は使えませんし、経済力もありません。渡辺一夫が引用したセナンクルの「人間は所詮滅びるものかもしれない。だけど、抵抗しながら滅びよう」という文章ですけども、滅びないために、自分が生き延びるために、相手を滅ぼす戦争の論理は、仏教徒としてはやはりできません。だから、非力といえば非力ですよね。

朝比奈 まだ時間が少しありますが、ほかにいかがでしょうか。

工藤 朝比奈先生の同僚の工藤と申します。いま最後におつしゃつたことでわかつたのですけれども、ブータンの政体を動かしている力、思想的な力と、ダライ・ラマの思想というのは、もっと具体的におつしゃつてくだされば、どういふ……。ブータンの今の政体の思想というのは、ダライ・ラマの、今おつ

しゃつたようなそれを生かしているようなものと考えてよろしいですか。

今枝 プータンのあり方と、ダライ・ラマ十四世が、チベット仏教徒として考えていることは、本質的には同じだと思います。プータンは世襲王制で、チベットのように僧侶(宗教者)を国家元首に抱く国ではありませんが、それを支えている、あるいはその最も基本にあるのは、やはりチベット仏教の思想だと思います。

最初にユマニスムは、人間至上主義、人間中心主義と言いました。ユマニスムというのはそういうことです。それは。人間を他の動物から区別して特別視するキリスト教を背景とするフランスで生まれたものとしては当然です。しかし、プータンは仏教国であり、仏教では、人間も動物もいっさい区別せず、すべて同じく有情です。ですから、プータンの仏教ヒューマニズムは、人間至上主義ではなく、人間も含めたすべての生き物を考慮しますから、有情至上主義といえるものです。それが環境保護にも大きく影響しています。

プータン人は、ことさら環境を保護するという意識は、だれ一人持っていません。しかし、木にはちゃんと命がある。木にも情がある、と考えています。もちろん動物は殺しません。そしてはつきりしているのは、彼らは土地の所有に關しても、自分たち人間が所有者ではない、自分たちは借りているだけだ、と考えています。それはチベット仏教の大原則であつて、人間

は一時的に土地を借りているだけで、土地の本当の所有者は、人間ではない別の有情であり、その土地に住んでいます。だから、建物を建てる時にも、彼らから借りるだけです。自分のものではありませんから、勝手にほだできません。お金になるからといって、土地を掘り返して鉱物を採掘するとかはあり得ません。

プータンの普通の人は、はつきりと意識しているわけではありませんが、本当の深いところで、命のあるもの、自分らを取り巻く世界というか、宇宙といったものに対する考えに、大きな違いがあります。プータンの人たちは、日本もそうだったように、お坊さんが昔から言っていること、迷信に近いことを、何の理解もなく、そう言われているから、やっているだけのことで、その根拠にはこういう本来の仏教的な考え方が生きています。それが今の政体にも反映されているのだと思います。

僕は、国王自身から環境問題に關して、次のような話を聞いたことがあります。プータン人は、森の中に入るのを非常に怖がる。ただし、森に棲む動物が怖いのではない。森には森の神様がいて、それはイノシシよりもヒョウよりも何よりも怖い。それを害すること、その気にさわることをすると、神の祟りがある。だから、森林は守りたい。山も同じで、神様がいて、行きたくもない。それから湖もそうです。湖には必ず湖の主というか、精がいる。それが怖い。だから、絶対に物は投げ込まないし、音も立てない。それは迷信といえれば迷信で、プータン

の一般の人はそれ以上のことは考えていない。しかし、結果的にはそれが非常にいい形で、今のブータンの環境を守っている。その一番の根底に仏教的な世界観というのが正しく、きっちり守られている。

工藤 それは先進国の多くとはほとんど革命的に違いますね。**今枝** 違いますね。立脚点というのが本質的に違います。

工藤 日本でもアイヌとか、そういう共通のところはあるんですか。

今枝 日本人は持っていたと思います。むしろ日本人のほうが、自然に対しては非常に敏感だったと言えるでしょう。日本人は、仏教の教義の理解、あるいは修行の面においては、チベット人に劣るところはあると思いますけれども、日本人は、ほかの民族にない、ものに対する感受性の繊細さ、例えば季節の移り変わり、それから植物、星とか月とかすべてのものに対する非常に繊細な接し方を、ものすごく大切にしてきました。風もそうですし、水も、川の流れもそうですが、自然界の諸々の要素とすごく調和して生きてきました。二千年もの長い間、さらにはもつと前から、そうでした。そして、それが今でも確かに生きているといえば生きていて、今の日本のあり方に非常に肯定的な影響を与えていると思います。

日本は、殊に第二次大戦後、あまりにもバランスを崩して、極度に経済発展至上主義に走ってしまいました。それにもかかわらず、日本がこれだけいいところを残しているのは、日本人

の繊細な感受性というか、自然に対する接し方が、抵抗要素として機能しているからだと思います。けれども、ブータンのように、それが主流ではなくなってしまった。やっぱり悲しいことですよ。

殊に日本人は美的、感覚的な繊細さにおいては、本当にほかの民族以上に感性を発達させました。それは日本の自然が豊かだったし、変化に富んでいたから、そこに住む人間として当然の結果といえそうです。ほかの民族と比べて、日本人のほうが上だということではなくて、独特な、非常に洗練された、高度な感受性を持った国民だと思います。だけど、それを全く無視する形で国の経済活動、工業活動がなされてしまったのが、この半世紀余というのが現状だと思います。

朝比奈 ほかにいかがでしょうか。

質問者B 朝比奈先生のゼミで勉強させていただいています。素朴な疑問なんですけど、先ほどこの世の中をよくするために、結局、個人個人が精神革命を起こすとおっしゃっていたのがおもしろいなと思っていて、その個人が精神革命を起こすために、一人一人の心に波を立てるといえるか、具体的に波を立てるためにどうしたらいいのかというのを知りたい。それは先生の意見でも構いませんし、人の心を宗教以外で動かすにはどういうふうな方法があるのかと思って。

今枝 仏教の伝統からすれば、それは本人次第だということになりますよね。ある面では、仏教はものすごく個人主義的な

ところがあって、開祖自身が最初から言っていることは、弟子として受け入れるに際しても、弟子に、まずは私が行うこと、言うことを見て、考えて、それで私が言っているからいいというのではなくて、自分もやっぱりそうだと思う人を初めて入門させるというか、弟子として受けとめる、そういう鉄則が仏教の場合にはあります。ですから、一概に、この教えはいいから、それに従うというのではなく、やはり一人一人が考えて、受け入れる。これがいいと思えば、する。いいと思わなければ、しない。それが原則です。

ただ、それを促進するための装置はあります。一つは教団です。教団として、ああいふ集団で、ある一つの理念に従って生きている人たちがいる。そうすると、俗人というか、一般の人はそれを見て、それがいいと思えば従う。けれども強制はできない。ただし、集団でいるということは人の目につき、アピールの機会が強いわけです。一人一人がばらばらで行っていたのではわからないけれども、百人、二百人という集団がある。それが一つですね。

もう一つは、チベット仏教の伝統では、生きた師が最重要視されていることです。チベット仏教が、どうして「ラマ教」と俗称されているのかと言いますと、「ラマ」というのは自分の先生ということですよ。大切なのは、先生がいるかどうかということ。日本ですと、仏教は、明らかに本の世界、知識の世界になりつつあります。仏教に関する本をみんな一人一人

読んで、これはいいことが書いてある、キリスト教の言っていることとは違う、云々のレベルで全員が仏教に接しています。それで、それなりに癒されるなり、救いになったとか、助かったとかいうレベルですよ。

チベットは絶対にそれはありません。生きた先生から教わる。そして一番大切なのは、その生きた先生のカリスマ性です。先進国では、やはりマスコミの役割が大きく、何事もマスコミに載らなければ広まりません。しかし、マスコミに載るものと、マスコミでは伝わらないものがあるということを、チベットの人は知っています。だから、だれもマスコミで話題になった先生のところに教えを請いに行ったりなんかはしません。ある人が「自分はこの先生についていて、この先生はいい」と言えば、「それでは、わたしも一緒に行こう」という世界です。生き身の先生がいるかないか、それが決め手です。本では、知識としてしか伝わらなくて、それでは意味がありません。

例えばダライ・ラマ十四世にしたところで、もちろん本も書いています。それはたしかに、彼の生き方とか、チベット仏教の価値観とかを広めるのに貢献はしています。しかし本来の形は、いつか先生について、その教えを自分で吟味してみて、自分もやっぱりそう生きたい、と思う人が弟子になって、初めてそれが継承されるのであって、ある人が独自にマスコミなりテレビで見て、おもしろい、あるいは本を読んでいいと思う、だから私は仏教徒になる、あるいは修行する。それは初めからあ

りませんね。

質問者B 先ほどお話があつたように、本来もともと高度な感受性を持った日本人が、今はそうではなくなっているという状態を喚起させて、もっと国民を高度な感受性を持つ状態に戻すには、マスコミではできないと。

今枝 と思いますよ。彼はそうはつきり言っています。本人の自覚の問題であつて、いくらマスコミが騒いだところで、教育を施したところで、それは仏教本来が目指しているものとは違ふし、仏教本来のあり方ではない。それは、彼の場合はつきりしていますよね。チベットの坊さんたちは全員それはつきりしています。

質問者B ありがとうございます。

質問者C もし可能でしたら、配布資料三ページ目について質問させて下さい。

今枝 三ページ目ですね。はい。

質問者C 「きみがバラのためにむだにした時間のぶんだけ、バラはきみにとつてたいせつなものになつたんだ」というところですけれども、「そのぶんだけ、バラにとつて、きみがたいせつになる」のではなくて、「バラがきみにとつてたいせつになる」というところ、ご説明いただけませんかでしょうか。

今枝 この資料は、お配りしましたが、説明しませんでした。これはものすごく深いものだと思います。それで、今おっしゃつた解釈ですが、僕はまったく思いつきませんでした。今問題の

「時間をむだにする」ということですが、フランス語の原文では *perdre le temps* です。その日本語訳は、本当にまちまちですが、それでも多くは「時間を費やした」「手間をかけた」とう訳です。しかし本来は、絶対に「むだにした」「失つた」でないのだめだと思えます。英訳も、最初の訳者はきつちりと「waste」と訳していますし、その次の人も「waste」と訳していて、これは両方とも「むだにする」「浪費する」という意味です。これは、ものすごく大切なことだと思えます。

今の例でいうと、王子とバラがありますよね。この文章は、キツネが星の王子さまに対して言つたもので、王子にたいして、「あなたは、バラのために時間をむだにした。だから、そのバラはあなたにとつて大切になつたんだ」と。いまあなたがとおつたのは、バラの立場から、この王子から時間を割いてもらった、手間暇かけて、世話していただいた、だから、日本式に言えば恩がある、だから、バラにとつて、この王子さまが大切になる、ということだと思えます。この見方、解釈は、僕は考えたこともありませんでした。僕は、王子にとつてバラが大切になつたという関係でしか考えていませんでしたし、著者はまず絶対にその関係でしか見ていないと思えます。時間をむだにしたから、その対象が大切になるんです。時間を有効に使つたのでは、絶対にここで言う意味での大切さは生まれてこないと思えます。ですから、これはむだでないのだめなんです。

星の王子さまは、自分の住んでいた星で、気難しいバラの言

うことを聞いて、水をやったり、つい立てを立てたりしましたが、結局全部むだになってしまいました。バラとの関係がうまくいかなくなつて、自分の星を捨てて地球に出てきました。仲たがいに終わってしまったのですから、費やした時間、手間はむだになってしまいました。このむだがあったからこそ、今のバラが王子にとつて大切になっています。

普通は、こういう状況を想定しません。例えば、母親が子供の面倒を見る場合、労力を費やし、手塩にかけて、育てる。そして子供は立派に成長する。だから、母親は労が報いられ、母親にとつて、自分の子供はかわいくて、大切だということになります。あるいは、友人関係にしても、努力して、仲のいい親密な関係になつた、だから、その努力は報われた、報われたから、その友人は大切だということになります。それが、普通の次元です。しかし、『星の王子さま』の著者は、全く違う次元のことを言っているのだと思います。逆説的に、努力も時間もむだになつたからこそ、その努力と時間を費やした対象である相手が大切になるんだ、と。

星の王子さまは、自分の星にあつたバラに時間と労力を費やしました。けれど、仲たがいで、地球に来てしまいました。地球に来たら、五千本の、もつときれいなバラが咲いています。けれど、それを見たところで何も感じません。彼いわく、「あなた方は全く意味がない、私にとつて大切なのはこのバラだ」と。仲たがいでいたバラを、地球から見て思い出して、やはりそ

れが大切だと言っています。なぜ大切かというと、時間と労力をむだにしたからです。これは結構深いというか、普通の論の次元を超えています。

まったく同じ次元とは言えませんが、無償の愛というのが、これに一脈通じるものがあると思います。極端に言えば、投資に対しては、見返りがあつて当然、見返りあつての投資という次元が普通ですけれども、著者はむしろ、本当に大切なものは、見返りがあるものではなく、だめだと言っているのではないのでしょうか。時間も、労力も、お金もむだになつてしまつて、なおかつ純粹に大切に思えるもの、それが本当に大切なものである。さらに言えば、そのむだという試練を経て、本当の愛情が生まれるということ、言っているのではないのでしょうか。

話はそれるかもしれませんが、日本人の場合、「正直者はばかを見る」という言葉をよく聞きます。だから、「ばか正直ではだめだ」というのですけれども、本当の正直ということとは、報われるか報われないかということとは関係なく、正直であるということだと思えます。「私は正直だったから、報われて当然」と思つたり、報われなかつたら、「私は正直だったのに、報われなかつた」という不平を言います。しかし、それは利害関係の次元であつて、やつぱりおかしいと思います。「正直だったから、ばかを見たのが悔しい」とか、「正直者はばかを見るから、ばか正直にならないようにしよう」と言いますけれども、それは次元が違ふんですよ。

本来の仏教的な解釈からしたら、報いがあるかないかは、まったく意味のないことです。正直であるということが、既に人間のあり方として最も基本にあります。ですから、それから外れることはできません。その正直さに対して、何らかの報いがあったところで、なかったところで、それは本質的なことではありません。

サンⅡテグジュペリが強調したかったのは、それに一脈通じると思います。星の王子さまとバラは、結局うまくいかなかった。そういうことからすれば、水をやったことも、つい立てを立ててやったこともむだだった。だけど、そのむだがゆえに、このバラは、星の王子さまにとって、ここにある五千本にたいするよりも、思いがあり、きずながあります。ですから、一見すると、費やした時間は、むだだったように思えますが、一概にそうではありません。きずなに、報酬なり見返りを期待するということは、やっぱりおかしいんですよ。関係がゆがんでしまふ。

「むだにしたからこそ」という逆説的な次元は、普通の論理の次元とは本質的に違います。仏教にはこうした次元の教えがよくあります。実生活は経済で成り立っています。それで各人各人、経済的な基盤がなければ生活が成り立ちません。どこの社会でもそうですが、その中において、この次元というのはなかなか難しいものがあります。

話は飛びますが、今日読んだ文章でおもしろいものがあります。

した。これもまた教科書に出ていたんですけども、『サラタ記念日』でデビューした俄万智という詩人がいますよね。その彼女が、今のことによく通じるおもしろいことを書いています。彼女は、一つのことわざを取り上げて、言葉の問題として論じているのですけれども、このことわざの解釈が、今の日本では完全にひっくり返ってしまっていますから、話の説明が結構ややこしくなりますが、「情けは人のためにならず」ということわざです。問題はこの「に」なんです。本来は「情けは人のためにならず」で、「に」がなかったのが、今は「に」が入っているのが、どうも一般的ということですよ。

俄万智が耳にしたのは、次のような高校生の会話です。

「おーい、おまえ。情けは人のためにならずって、どういう意味か知ってる？」

「下手に同情したりすると、本人のためにならないということじゃないの？」

「え、そうかな」

「ということ始まりすけれども、「情けは人のためにならず」ということわざの、現在の一般的な解釈はこうです。」

例えば、ある人が困っています。そうすると、その場限りのヒューマニズム——ここでヒューマニズム「人道主義」という言葉が使われます——や安易な同情で親切にしても、かえって本人のためにならないというふうに解釈されています。だから、人が困っているときに情けをかけてやる、親切にしてあげると

考え方が根底にあるから、行き過ぎたことにはならないというお話だったと思います。

例えばの話、非常に具体的に申し上げますと、川があつて、毎年夏に洪水で水があふれてきてしまう。どう考えてもここはガチツとしたコンクリートで堤防をつくつたほうがいい。あるいは川の上流にダムをつくつて、そのダムで発電する電気を引いたほうが明らかに便利になる。あるいは、肥料を使って作物をたくさんこさえたほうが、例えば子供の栄養不足が解消される。そういうふうに、今の有情の世界を部分的に修正する、あるいは場合によっては否定するという形で、社会がよりよくなつていくだろう、どんどんよくなつていくだろうというふうな西洋型の進歩史観ですけれども、そういう感覚というのは、ブータンの方にはあまりないというふうに思っている。

今枝 あまりないですね。そういうアブローチは、ものすごく早い段階で制御されました。それがだめだというのではありません。ある時期、しかるべきときに、そのほうがいい、あるいはそうしなければ、今まで培ってきた伝統なり、ブータン人が大切にしているものが危険にさらされるのであれば、そう動かざるを得ない。けれどもその判断というのは、日本人の判断とは相当違いますよね。

それからもう一つはっきりしていることは、ブータン人は欲望こそが最も危険なものであるということを知っています。物は、持てば持つだけ、もつと欲しくなる。それが問題であつて、

物が要らないのではない。物はあればそれにこしたことはない。だけど、本当に必要かどうか、あるいは時間と労力を割いてまで、入手しないとだめかどうかというときの判断基準が違います。これは別に、ブータン人が優等生ぶつて、「私たちは寡欲で、そんなぜいたく品は欲しくない」と言っているわけではありません。子供のときからよく考えています。

日本でも、ブータンでのインタビュアーが幾つかテレビ番組で紹介されましたが、優等生みたいな答えが返ってきています。ほとんどの視聴者は、あれはやらせじゃないかと思つていて、でしよう。僕自身も最初、外国のテレビからのインタビュアーで放映されるから、ちよつとは考えて言つているのかと思つていましたが、けつしてそうではないですね。生活の中での本心を語っています。

僕自身、テレビ番組の取材協力でインタビュアーしたことがあります。賢いというか、すごいことに気がついているんだなと思つたことがあります。若い女性でしたが、彼女は、「私は、今あるもので幸せであろうと努めるほうが大切だと思います、今ないものを手に入れようと努めるよりは、今あるもので幸せになろうと努めるほうが、私にできることですし、そのほうが大切です」と、街頭でのとっさのインタビュアーに答えました。これは結構驚きでした。

欲というものは限りがない。何か一つ手に入れたら、もつと欲しくなる。そして、その欲は、自分だけがコントロールでき

るものであって、政府も関係ない、親も関係ない、自分で自分の欲しいと思う心をちゃんとコントロールできるかできないか、それが仏教が問題にするところです。所有物を少なくして、立派に生きている見本があるわけです。所有物、財産の少ない人全員が惨めな生活をしていけば、やっぱり物がたくさんあったほうがいい生活ができると思います。だけど、少なくともブータンの現状からすると、物なんか一切持っていないなくても、ずっと幸せな顔をしている人が現にいるわけですよ。

その典型が、私有財産を持たないお坊さんの集団です。これはすごいことだと思います。自分の家も持たない。それから、自分の持ち物もほとんどない。持っているものといえば、腕時計とラジオくらいです。そういう人が、男であれば五十人に一人います。日常生活で、社会の様々な場でそういう人と接します。そのお坊さんの中で、悩み事を抱えているような人は、皆無と言つていいでしょう。彼らはそれなりに輝いている見本です。そうすると、子供たちはそういう生き方をしたいと思います。それで、どうしたらそういうふうに生きられるかと、そういう人に聞きます。

欲というのは限がない、それは自分でしかコントロールできないと彼らは知っています。洗濯機がないとか、自動車がない

とか、そんなことはだれも言いません。自分が欲しいと思えば欲しくなりますし、自分が欲しくないと思えば欲しくありません。だけど、それを決めるのは国でも、統計でもない。あなたが欲しいのなら仕方がない。その欲望を抑えられない、あるいはちゃんとコントロールできないのだったら、あなたは欲望に使われる身になる。だから、自分が欲望を抑えるのか、逆に欲望の奴隷になるのか、自分でちゃんと考えなさい、と。それはお坊さんたちが、自らの生活を通して発しているものすごく強いメッセージです。そういう見本があります。

長い目で見れば、ブータンも変わっていくと思います。欲のほうが強くなるかもわかりません。しかし、少なくとも現時点において、あなたが主人で、欲を制御するのか、逆に欲が主人になって、あなたがその奴隷になるか、どちらかを自分で決めなさい、というのは、全員に浸透している教えです。

湯沢 どうもありがとうございます。

朝比奈 ほかにはいかがでしょうか。よろしいですか。大変興味深いお話の上に、とても活発な質疑があつて、すばらしい会になりました。ありがとうございます。

今枝 どうもありがとうございます。(拍手)